

インタラクシオン 2008 参加報告

小坂崇之

金沢工業高等専門学校 国際コミュニケーション情報工学科

2008年3月3日、4日の二日間にわたり、学術総合センター／一橋記念堂においてインタラクシオン 2008 シンポジウムが開催された。インタラクシオンは毎年この時期に行われる規模の大きなシンポジウムであり参加人数は大変多い。今回の参加は659人となり、参加人数の多さからこのシンポジウムの注目度とその重要性が伺える。

招待講演は、国立シンガポール大学 Mixed Reality Lab. Director の Prof. Adrian David Cheok 氏を迎え、“Embodied Media for Social and Physical Interactive Communication and Entertainment”という題目で基調講演を行った。“人間パックマン”や、鶏に着せるジャケットなどのビデオが紹介され会場の笑いを誘っていた。(図1)

インタラクシオン 2008 は大きく一般公演、インタラクティブ発表、ポスター発表の3つの発表に分かれている。発表件数はそれぞれ一般公演が13件、インタラクティブ発表が63件(うち一般発表のデモ7件)、ポスター発表が64件であった。

一般公演では、事前にプログラム委員によって査読された論文に関する研究発表が行われる(図2)。大掛かりかつ最先端の研究を知ることができる貴重な機会である。最も優秀な論文はベストペーパー賞として選ばれる。

今回のベストペーパー賞には

- 人の印象形成におけるキャラクタ瞬目率の影響：高嶋和毅(大阪大)、大森慈子(仁愛大)、吉本良治(シャープ)、伊藤雄一、北村喜文、岸野文郎(大阪大)

が選ばれた。これは、仮想コミュニティなどのキャラクタの瞬目率を制御することによってキャラクタの魅力や心理状態の表現を可能とする手法を検討していた。



図1:招待講演



図2:一般公演

インタラクティブ発表とは、一般公演のように壇上でスライドを用いて発表するのではなく、研究成果そのものを会場に持ち込み、実際のデモンストレーションを行うことができる発表である。参加者もさまざまな成果を実際に体験できるとあって、双方に人気が高く、長蛇の列ができるブースも多く、毎年活発な意見が交わされている。(図3)

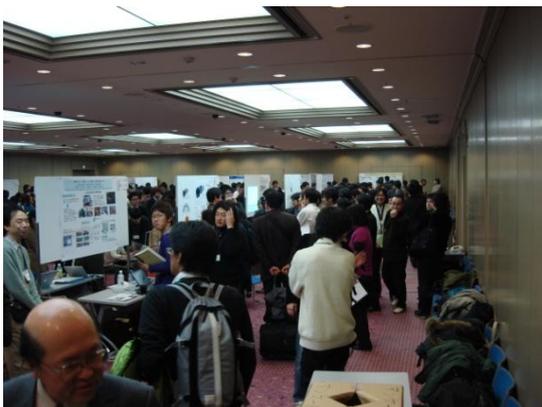


図3:インタラクティブ発表風景

一枚の紙束(TABA)は、将来の電子ペーパーに向けたフリップインタフェースとして、フリッピング(1ページのめくり)とフリップブラウジング(複数ページの連続しためくり)に注目し、従来の物理的な紙束インタラクションにより近いフリップインタフェースを実現したコンセプト評価モデルの開発について報告していた。



図4:一枚の紙束(TABA)

このインタラクティブ発表では参加者の投票によって2日間それぞれに上位の発表にたいしてベストインタラクティブ発表が贈られる。

一日目のベストインタラクティブ発表には、

- 一枚の紙束(TABA): 電子ペーパーの未来に向けたフリップインタフェース: 光永法明, 米澤朋子, 田近太一(ATR)(図4)
- Orpheus: 歌詞の韻律を利用したWebベース自動作曲システム: 米林裕一郎, 中妻啓, 西本卓也, 嵯峨山茂樹(東京大)(図5)
- こめかみスイッチ: 瞬きパチパチでスイッチカチカチな常時装用入力装置: 谷口和弘, 西川敦, 宮崎文夫(大阪大)(図6)
- 文字認識「する側」と「される側」を歩み寄らせるインタフェース: 篠原祐樹, 宮下芳明(明治大)(図7)が選ばれた。



図5:Orpheus

I OrpheusはWebブラウザ上で日本語の歌詞を入力し、作曲のパラメータを選択すると、歌詞の旋律に基づいて自動作曲が行われ、伴奏付きの合成歌唱音声と楽譜が出力されるシステムについて報告していた。



図 6:こめかみスイッチ



図 8:生物感提示装置



図 7:文字認識「する側」と「される側」を歩み寄らせるインタフェース

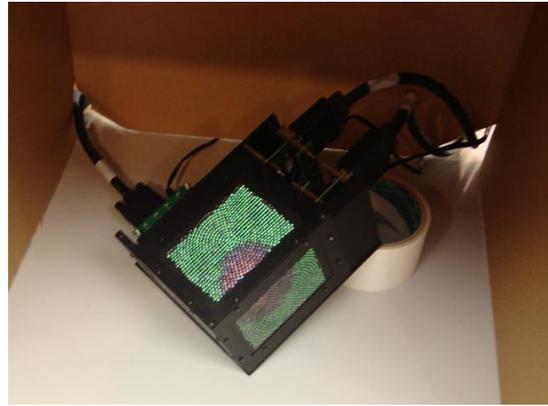


図 9:広視野角なレンズアレイの提案による箱形立体ディスプレイの検討

二日目のベストインタラクティブ発表には、

- 生物感提示装置：橋本悠希，梶本裕之(電通大) (図 8)
- 広視野角なレンズアレイの提案による箱形立体ディスプレイの検討：Lopez-Gulliver Roberto, 吉田 俊介, 矢野 澄男, 井ノ上 直己 (NICT) (図 9)
- 腹部を通過する仮現運動を利用した貫通感覚提示：渡邊 淳司 (JST/NTT-CS 研), 福沢 恭 (東京工芸大), 梶本裕之(電通大), 安藤 英由樹 (NTT-CS 研) (図 10)

が選ばれた。

生物感提示装置は、スピーカを振動子として手掌部へ様々な鼓動運動を提示する装置である。生物特有の「やわらかい」感触も再現できると長蛇の列が出来ていた。



図 10:腹部を通過する仮現運動を利用した貫通感覚提示

広視野角なレンズアレイの提案による箱形立体ディスプレイの検討では、コミュニケーションツールとして、立体映像を手に持ち複

数の人と同時に映像を共有できる箱形立体ディスプレイを提案していた。

ポスター発表は、インタラクティブ発表のようにデモまでいたらないまでも、来場者とのディスカッションを通じて発展が望める研究に発表する機会を与えている(図 11)。



図 11:ポスター発表

こちらでも積極的な発表が行われ活発な意見交換が行われていた。ポスター発表は、一般公演、インタラクティブ発表と共にインタラクシオンの目玉となっている。

ポスター発表では、発表用の電源は用意されないが、

- **二人酒：「一緒に飲んでいる感覚」を実現するチャットを目指して:寺田知矢, 宮下芳明(明治大)**

では、バッテリー駆動の実機を持ち込みインタラクティブ発表さながらのデモンストレーションを行っていた。これはビアサーバを制御して遠隔でもお酌を実現し、また一方でヘッドセットに取り付けたアルコールセンサで呼気中アルコール濃度を計測し、ビデオチャット画面に赤面エフェクトをかけて酔いの状況を伝えやすくするというものであった。

昨年度に引き続き、Microsoft Research、Google がスポンサとして参加しており、Google ブースでは、Google グッツの配布を行いジャンケン大会(図 12)が行われるなどブースには絶えず人だかりが出来ていた。また、ドーナツとコーヒーが振る舞われた。(図 13)



図 12:じゃんけん大会



図 13:ドーナツとコーヒーブース

インタラクシオンは、常に斬新なアイデアと実際のデモンストレーションに触れられ開発者と討論できるという点が最大の魅力である。年々、投稿数と参加者が増えておりインタラクシオンに対する期待度が伺える。

来年のインタラクシオン 2009 は、2009 年 3 月 5 日(木)~6 日(金)、学術総合センター / 一橋記念講堂にて開催予定である。